

ワケ カタチには理由がある(19)

～メッサーシュミット Bf109E-7 戦闘機



[↓零戦21型と]



本機は、第二次世界大戦の緒戦でドイツ空軍の屋台骨を支えた戦闘機です。Bf109はスペイン内乱に投入されたD型をはじめとして、「英国の戦い」(Battle of Britain)でスピットファイアと戦ったE型、アフリカ戦線に送られたF型、そして、米国陸軍のB-17やB-24を迎撃したG型、K型と長年に亘り改良を繰り返して使われました。零戦やスピットファイアも同じですが、うなぎのかば焼きのタレのように徐々に継ぎ足し継ぎ足しで変化していきます。このE-7型は、「英国の戦い」終了後の型式ですが、華奢な印象を与える初期E型から、多少グラマラスな印象を与えるF型、G型に移行する過渡期の機体で、両者の良いところが出ている気がします。日本人は軽薄短小のモノづくりに優れると言われるので、零戦は小型の機体のように想像してしまいがちですが、両機を並べるとBf109の方がより小さく、この評価は米国の機体と比べてのことに過ぎない、ということがわかります。ちなみに、メッサーシュミット社なのに“Bf”の名が与えられているのは、この機体の採用時、会社名が「Bayerische Flugzeugwerke」(バイエルン航空機製造会社)だったため(その他にBf108、Bf110)、1938年7月以降に正式採用された機体から“Me”と表記されるようになっていきます(例えば、Me210、Me163、Me262)。

【模型について】

英国のエアフィックス社(Airfix)1/72のインジェクションキットです。このキット、新しいだけあって表面彫刻がとても良いのですが、胴体後半が太く感じるのが残念でした。そこで、この作品は、胴体後半をハセガワ(Hasegawa)のモノに取り換えています。



(中川裕幸 2021年4月)